今月のことば　令和6年（2024）3月　<No.211>

はかなく辛いからこそ

最近、身近な方が立て続けに急逝されました。蓮如上人（本願寺 第八代）が書かれた白骨の御文章にある**「朝（あした）には紅顔あって夕（ゆうべ）には白骨となれり」**という言葉を、いま深く味わっております。

蓮如上人は生涯で五人の妻（うち四人とは死別）をめとり、多くの子に恵まれました。しかしその分、大切な家族との別れも数多く経験されています。二十代の娘・見玉を亡くした時のこと…。

見玉を荼毘にふした夜、蓮如は「白骨の中より三本の青い蓮華が出生し金色の仏が現れ、その仏が蝶になって消えた」といった夢を見たというのである。ここには、病に苦しむ中、自分（蓮如）の説法に耳を傾け、二十五歳で往生した娘の臨終から葬儀の様子、見玉という名の由来、まちがいなく浄土へ往生した実感などが書きしるされている。

見玉の往生を契機として、蓮如は女性の往生について懸命に取り組むようになったとも言われている。

『ブッダの伝道者たち』釈 徹宗 著 より

蓮如上人は中世（15世紀）を生きた方です。この時代に、本願寺は小さな一つの寺院から、全国津々浦々に念仏者を生み出す大教団に発展しました。しかし若い頃は困窮をきわめ、自ら子どものおむつを洗いながら、食べていくのにも苦労したといいます。

本願寺の発展は50歳を過ぎた頃から。一心に念仏して阿弥陀様に救われていく道を説くのですが、俗世にまみれて生きる人々を低く見るようなことはなく、日々の暮らしを大切にしていくことも伝えていきました。

蓮如上人のお手紙に、次のようなものがあります。

「お念仏のみ教えは、自分の悪い心や妄念妄執などといったものが起こるのを止めなければならないというものではありません。ただひたすらに商いをし、奉公をし、（殺生となる）猟や漁などもしなさい。…そうした悪業の者こそを救う如来の本願なのです…。」

「苦悩の人生を生き抜く者のためにこそ、この仏道はある」・・・
その基底には、もろくはかない日常を見据える仏教者の眼があった。すべてのものは一時的状況であり、刻々とうつろいゆく、そのことを身心の髄まで知解していたからこそ、その日常のいとおしさが見えたのである。・・・**はかなく辛い人生だからこそ、大切にする。ひとりで生き、ひとりで死んでいく、だからこそ互いにつながり分かち合うのである。もろいからみんなで慈しみ関わり続けるのである。**

「だからこそ」と、歩んでいくこと。その先に、つながり・分かち合う「御同朋（おんどうぼう；お念仏と共に歩む仲間）」の世界が開かれます。

慧日山 真光寺